

# 公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

## 研修報告書 (2018年度 助成者)

作成日 2018年 11月 11日

氏名 (フリガナ)	兵頭 美和 (ヒョウドウ ミワ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2018年10月7日 (日) ~ 10月13日 (土)
所属機関名 身 分	所属なし

今回、私は以前から興味を持っていたアメリカ看護研修に参加し、改めて看護について考え、そしてアメリカの医療を見て世界観を広げることが出来ました。5日間という期間でしたが、実際はその期間以上に濃厚な研修でした。その中での学びを報告致します。

まず、アメリカの規模の大きさとハイテク技術、個人を尊重する徹底ぶりに驚き、またそのプロ意識の高さに日本との違いを感じました。OHSU 付属ドーンベッカー小児病院が最もそれを象徴する病院でした。マグネット・ホスピタルの認定を受けている病院であり、病院の玄関から廊下、病室に至るまで子供が楽しく過ごせるように工夫され、安全対策や音響、家族への配慮もあり感動しました。そして専門職であるチャイルド・ライフ・スペシャリスト (入院がトラウマにならない様に小児の心理・発達に合わせてサポートする認定者) がおり、人形を使って手術や処置の手順を説明したり、入院中の子供だけでなくその兄弟のサポートや難病で余命わずかな子供に終末について伝える事もしていました。レクチャーをして下さった Sandra さんが、どのように終末を伝えるのか実際の場面を話して下さいましたが、それを直接伝えるのではなく子供の心が自然と前向きになるような言葉かけ、表現を用いていました。Sandra さんはセラピー・ドッグ (訓練されたレトリバー) と一緒に活動をしていましたが、セラピードッグは子供の心をほぐす力があるだけでなく、Sandra さんにも勇気を与えているのだと感じました。建物や設備などハード面だけでなく、ソフト面においても素晴らしさを感じました。

また、AMR の救命司令センターにおいてもアメリカらしさを感じました。コールセンター室内にある数々の通信画面、巨大な救急車、看護師が投薬できる薬剤や気管内挿管の備品も揃い整理整頓されていました。シェリーさんという女性の救急隊員の方が説明をして下さいましたが、隊員の4割が女性で皆、体力テストに合格し男女差はないとの事でした。日本では救急車の運用は行政業務ですがアメリカでは地域の郡と民間企業である AMR が提携し有料です。そのため誰でも利用できる救急車ではないのだと違いを感じました。

ハイテク技術を強く感じたのはポートランド大学のシュミレーションラーニングリソースセンターでの Wi-Fi doll を使った急性期医療のシュミレーション学習です。患者はどのような罹患歴があり何が起こりうるのか事前学習をし、教官は Wi-Fi doll に血圧や不整脈など異変を起こし、学生はそれにどう対応するのか、また別室では他の学生達がそれを見学し、その後、その対応はどうであったか振り返り学習をするというものです。日本では就職後に新人教育で看護技術を習得していく傾向にありますが、学生の時から実践に近い経験をすることで自信となり、離職率を下げることに繋がり、アメリカの看護教育レベルの高さに驚きました。

個人を尊重する、という点については現地ナースとの交流時に「欧米に寝たきり老人はいないのか」との問いに、「いる、でも日本よりずっと少ない」との返答でした。それは、早期の段階から POLST (生命維持治療に関する医師指示書) が普及している事を言われていました。アメリカでも認知症患者の増加が社会問題となっており、POLST により初期の認知症患者が自己決定権を失う前に、医師と話し合いながら人生の終わりについて選択します。日本でも高齢化が進み寝たきり老人や認知症、介護や医療費など終末期医療に多く課題がある中で、各個人が自己の終末期について真剣に考え、リビングウィルについての議論をもっとすべきだと考えます。また、高齢者ケア施設においては、自立した人が入所する老人ホームのエントランスは高級ホテル並みであり、プールやジムも備えられ、一日中アート教室で楽しんだり、高齢者が余生を

満喫する様子が窺えました。アメリカでは家族が世話をするという概念がないようで、ここでも日本との違いを感じました。

プロ意識の高さ、という点についてはアメリカの看護師免許は2年毎の更新性であり、就職後もキャリアアップを図り、大学院で学位を取得したり、認定資格を取得したりと常に専門性を高めています。「マグネット・ホスピタル」の認定を受けるまでの過程や、そこで働いているナース達は、自分たちの仕事に誇りを持ち働いている事を感じました。「看護教育コーディネーター」という役割についても初めて知りましたが、この役割があることで看護の質や教育レベルを底上げしているのだと感じました。日本でも看護教育コーディネーターの役割は必要だと思います。

「リーダーシップと看護」の講師 Leeさんは、クリティカル・シンキングを持っているナースこそリーダーシップを持つナースであり、メンバーにインスピレーションを与え、モチベーションを与えることがリーダーシップである、患者さんを大切に思うなら上司や先輩でも正直に意見を言うべきだ、と情熱を持って自らの経験を語る Leeさんが印象的でした。アメリカのハイテク教育に追いつくのは難しいですが、クリティカル・シンキングの思考を深めていくことはいつからでも出来ます、常に患者さんを大切に考えながら行動すること、当然なことですが基本に戻り考えさせられました。

上記以外にも多くのことを学びましたが、自分が居る場所を離れて、外から日本を見ることも大切だと感じました。考え方に幅ができ、日本の良さや弱さがわかります。文化の近いや多様性について考えさせられました。日本は国民皆保険で誰でも医療を受けることができますが、アメリカのように医療保険を購入するとなると、格差が生まれます。しかし、日本は超高齢化社会であり寝たきりや認知症、終末期医療など、財源が問題となっています。アメリカは、リビングウイルについて40年も前から議論がされ法制化されています。それぞれ国の文化に違いはありますが、視点を変えてみる事で必要な事が見えてくるのではないかと思います。

最後に、今回、アメリカ・オレゴン州ポートランドでの研修ということで、ポートランドという街にも惹かれました。全米で最も住んでみたい街に選ばれていたからです。日々、研修スケジュールで満たされていたので、街を存分に楽しむことは出来ませんでした。空気が澄んでいて、小雨が似合う素敵な街でした。移動中の車窓からオレゴン富士を見ることが出来たことは幸運でした。この街で研修ができたことに感謝し、出会ったすべての方々、お世話になったすべての方々に感謝致します。有難うございました。